

〈二月革命〉と文学の挫折（Ⅲ）

—ポスト・ロマン派作家たちの存在論的＝歴史状況（下）—

柴田芳幸

La Révolution de février et l'échec de la littérature (Ⅲ)

— La Situation historico-ontologique des écrivains post-romantiques —

Yoshiyuki SHIBATA

さて、『＜未定稿＞＝マラルメ』において、「詩人の高貴な孤独は中産階級の分離主義の反映」⁽¹⁾に他ならない、とサルトルは言い、ボードレールから引用する。「多くの友〔には〕、多くの手袋〔がある〕……」⁽²⁾あるいは「子供の頃からの孤独の感情」⁽³⁾。他方で、サルトルがかつて『存在と無』のなかで記述した実存的・精神分析的方法によって、『ボードレール』（一九四七年）を了解するために起点〔基点〕としたのは、まさしくこの子供の頃からの「孤独感」に関する彼の考察であった、ということに留意すべきであろう。父の死（一八二七年二月）とそれに続いた母の再婚（一八二八年十一月）以前には、シャルル・ボードレール（六、七才）は——サルトルの解釈によれば——自分が母親の身心に、一種の原始的な神秘的融即〔未開人が神など上位の存在と自己を一体化すること。または「とけこみ」とも言って、あるものが同時に別のものでもある幼児的、原始的思考〕によって結ばれている、と感じていた。あれほど愛した母親と陸軍少佐オピックとの再婚、および彼の寄宿舎への入舎（一八三二年一月）以後に、ボードレールのあの有名な「ひび」が始まる。

この突然の決裂とそこから生じた悲しみのせいで、彼は一挙に個人的実存のなかに投げこまれた。ついさっきはまだ、彼は母と結成していたカップルの宗教的な一体生活によって身も心も浸透されていた。この生活が潮のように引くと、あとには彼が一人ぼっちで素っ気なく置き去りにされ、自らの正当化を失ってしまう。彼は恥辱のなかで、自分が一人であり、自らの実存は無駄に〔わけもなく〕自分に与えられているということに気付く。追い出されたという彼の激怒に、深い失墜〔失寵〕感が加わる。彼はこの時代のことを思い浮かべながら、『赤裸の心』のなかでこう書くだらう。「子供の頃からの孤独の感情。家族の意に反して——そしてとりわけ仲間たちの真ん中で——永遠に孤独な運命〔人生〕という感情。」すでに彼はこの孤立を運命のように考

えている。このことは、この孤立が一時的であって欲しいという望みを抱いて、彼が受動的にそれに耐えるだけにとどめはしない、ということの意味する。それどころか彼は激怒してそこ〔孤立〕に飛び込み、そこに閉じこもる、しかも彼は孤立の刑を宣告〔孤立を余儀なく〕されたのだから、少なくともその断罪が決定的であって欲しいと思うのである。私たちはここで、ボードレーが彼自身について行った原初的選択——私たちの各人が個々の状況において、未来の自分や現在の自分を決定する際のあの絶対的責任敢取〔参加＝端緒〕——に触れておこう。⁽⁴⁾

事実、ボードレーは彼自身『^{かせん}火箭〔火矢〕』のなかにこう書いている。「私が万人に嫌悪感と畏怖を吹き込むようになったとき、私は孤独を勝ち取ったことになる。」⁽⁵⁾ このテキストを自らの『ボードレー論』のなかで分析することによって、サルトルは、とりわけ彼が他人たちに嫌悪感を起こさせたいというこの〔詩人の〕欲望に「自己処罰の傾向」⁽⁶⁾を見出すとき、慧眼を示す。それにこのテキストは、ある意味で、ボードレーの晩年の誇らしい宣言に通じている。

多くの友〔には〕、多くの手袋〔がいる〕——疥癬を恐れて。
私を愛した人たちは軽蔑された人々だった、もし私がまうとうな人々のゴマをぜひすりたければ、軽蔑すべき人々だった、とさえ言えよう。⁽⁷⁾

——偽善的な読者、彼〔ボードレー〕の同類、彼の兄弟への例の暗黙の呼びかけだ。⁽⁸⁾

同様に、『＜未定稿＞＝マラルメ』において、自らの視点（ポスト・ロマン派作家の高貴な孤独は「中産階級の分離主義の反映」に他ならない。）をさらに強固にするために、サルトルは、フローベールがジョルジュ・サンド宛に書いた一八七五年三月二十七日付の手紙の一節を引用する。フローベール（五十四才）は当時、『ブヴァールとペキュシェ』という「常軌を逸した本」に着手し、「精神衰弱」に苦しんでいた。

私は老人みたいに子供時代の思い出に耽っています……。私は黒色で書きなぐるべきひと続きの紙葉以外に、もう人生からは何も期待しておりません。どこか知らない所へ行くために、私は終わりのない孤独を通過しているように思います。そしてこの私がまったく同時に、砂漠、旅行者それにラクダなのです。⁽⁹⁾（強調箇所だけがサルトルによる引用）。

したがって、この「ボードレーとフローベールという、両者ともに一八二一年生まれの、二人の本物の神経症者」⁽¹⁰⁾について、サルトルが『＜未定稿＞＝マラルメ』のなかで、「彼らは孤独であるのではなくて、彼らの階級が彼らを万人の孤独の模範としうるように、孤独になるのだ」⁽¹¹⁾と言うのは、彼が、複数の個人的水準をより包括的な社会＝歴史的水準のなかに、要するに客観

的精神〉のなかに統合したいからなのである。この意味で、ピエール・ヴェルストラーテンがサルトルの作品のうちに——歴史的基準について語りつつ——「似かよった複数の力線に応じて連結されたレベル〔水準〕を構成する、諸個人のミクロ〔微視〕的諸構造の意味に似た意味を、マクロ〔巨視〕的諸構造のレベルで解説する類推的マルクス主義」⁽¹²⁾を見抜くとき、彼はまったく正当であろう。それゆえ、この類推的マルクス主義の視点から、サルトルが『マラルメのアンガジュマン』のなかで、逆説的に一八五〇年の中産階級に特有の普遍的な伝達不可能性に関して、社会＝経済的水準と心理＝形而上学的水準の間の相互的コミュニケーションについて語っているのは、私たちにまったく当然に思われる。

自由競争と自由交易、生存競争。それらはどれもが、ホッブスのあの警句、つまり「人間人間ニトツテ狼デアル」によって要約される中産階級の標語であり、それを詩人たちは心理的あるいは形而上学的用語に移し替えることになるだろう。〔十九〕世紀の後半に開花することになる悲観的な哲学は丸々、それ以外の根拠をもたないだろう。ため息をつきながら、苦しげに、人間存在はうかがい知れない〔不可知〕ということを知った、と主張しないような三文文士かへば詩人はおるまい。⁽¹³⁾

ところで、彼の『サルトルとマラルメ』において、ヴェルストラーテンはこの一節を、『フローベール論』第三巻の次の一節と的確に対比している。

だが『家の馬鹿息子』のなかで、サルトルはこう補完している。「人間人間ニトツテ狼デアル」というこの文句を甘受すること、それはすぐにどんな暴動をも正当化することになるかもしれず、覆いなしに、暴力が始まる。⁽¹⁴⁾

というのは、一八四八年〈六月の虐殺〉と五一年〈十二月二日のクーデター〉の後に、まさしく問題なのは、「人間の人間に対するあらゆる敵対関係——先決すべき疑惑——の基盤、……『偽意識とイデオロギー的非＝知に根拠を与える』感情自体……すなわち主観的確信」⁽¹⁵⁾なのだから。

実際——「取り戻された読者」におけるサルトルの存在論的＝歴史的記述によれば——、〔二月革命の〕〈六月の戦闘の日々〉以後、「一八四八年の労働者」は、経営者の全般的利益——経済の競争的構造を維持し、そしてそれを通して、また商品＝労働者の加工＝労働を通じて、資本を蓄積すること——を明るみに出すことによって、「有産者階級の利益とは、無産者階級の運命である」⁽¹⁶⁾と突然に理解する。「経営者」はといえば、「彼には背後に、取り消せない行為がある。彼は殺したのだ。」⁽¹⁷⁾〔六月の虐殺を示唆〕。それで、自らの普遍性や、彼に良心〔道義心〕を与えていた家父長主義を奪われて、彼は他人たちの憎悪によって、自分が特殊な階級として構成されていると感じるのだ。こうして——マラルメ的連辞のサルトル的使用法を特記するヴェルストラーテン流に言

えば——「各人ノ自由ハ、ソレヲ否定シタ<歴史>ノ不可能ナ自由ノナカニ住ンデイル」⁽¹⁸⁾ ので、このような「<歴史>ノ神経症ノ開始」について、すなわち「自己否定にのりだす〔参加する〕<歴史>」⁽¹⁹⁾、要するに<逆説的歴史>について、サルトルはこう書く。

だが、他人たちが経営者に誓った憎悪の内面化が後者の中で進展しうるのは、まずは、次のような二重の憎悪の形としてのみである。つまり、経営者が客観的憎悪の主観化として自分自身に抱き続ける憎悪、そこから、彼を憎む人々に対抗して彼が投げ返す憎悪、すなわち対抗憎悪。こうして、奇妙にも、神の覆い〔庇護〕を失ったこの無信仰者は、人間の価値化によってしか正当化されえないが、そのヒューマンイズムの基盤は、一八五〇年には、もっとも徹底的〔根源的〕な人間嫌いでありえない。⁽²⁰⁾

そして、支配的思考形態は支配階級の思考形態であるという事実だけで、経営者の思考形態は被搾取階級に浸透し、それで労働者はこの偽ヒューマンイズムに欺かれて、自らのブルジョワ〔資産家〕嫌悪を自分自身に振り向けるようになるかも知れず、またきっとそうなるだろう。言い換えれば、無産者〔プロレタリア〕はもはやそれ自体としての有産者〔ブルジョワ〕を排斥するのではなく、後者においても自分自身においても、人間的本性を排斥せざるをえない。だが——前述のヴェルストラーテンの指摘を繰り返せば——、「どんな暴動をも正当化するかもしれない」あの『人間ハ人間ニトッテ狼デアル』という忌まわしい文句」⁽²¹⁾に甘んじることはできない。それゆえサルトルは、まさしくこう書く。

肝心なのは、(中産階級の覇権の道具としての)新ヒューマンイズムが、人間は自己排除〔自殺〕するためにのみ……生起する存在であるということ……示すことによって、「人間ハ人間ニトッテ狼デアル」をのり越えることである。⁽²²⁾

<人間的現象>の統治が存在するために——極限では——自己排除〔自殺〕すること。換言すれば、「一八五〇年にはヒューマンイズムはブラックである。つまり<人間的現象>——加工された物質、加工可能な物質——が<神>の代わりをしたのだ。」⁽²³⁾ そこから私たちがすでに語った<理想>への三重の疎外の倫理が由来する。すなわち、実践的知への有能者たちの犠牲(科学主義)も利益への資産家たちの犠牲(資本主義)も、当時、審美感の強制的普遍性を通して、<美>への<芸術家>の犠牲(<神経症=芸術>)を要求する。それはつまり次のことをよく示している。

教養のあるエリートや読書するすべを心得ている中産市民たちは<神経症=芸術>を待ち望んではない。<神経症=芸術>が中産市民たちの<芸術>になるのは、彼らがそれについて抱いている要求〔必要性〕を、<神経症=芸術>が堪能させることによって、創り出すからである。⁽²⁴⁾

もっとうまく言えば、

〈芸術のための芸術〉……は、作家をその文学的産物に疎外〔隷属〕させようとする固い決意以外の何ものでもない。作家は、美しい、つまり人間たちには無用の作品が、自分の難破から出現するように、身を滅ぼさなければならない。⁽²⁵⁾

要するに、ポスト・ロマン派の作家は、〈理想〉——知と利益というこの非人称的命合——に、審美的次元を与えるのだ。事実、美しい作品への〈芸術家〉の疎外〔隷属〕は、中産市民的人間の存在論的＝倫理的ステイタスの生きた象徴のように見える。教養のある読者と作者の間には、当時、それゆえ相互性がある。つまり彼らは人間の真実を、〈人間的事象〉への人間の犠牲のなかに見ているのだ。このような情勢においては、人間性の本質はそれゆえ「〈むなしい情熱〔受難〕〉」、「非常に長い人間的自殺」⁽²⁶⁾でしかありえない。

かくして、ルコント・ド・リールのような当時の〈芸術家〉が人間と実生活を描くのは、それらを、「バラモン」〔インドのカースト制度で最高身分の司祭階級〕や現代科学の叡智の名において、幻想として暴くためなのである。意図は明白である。それはすなわち「自己破壊」⁽²⁷⁾に他ならない。そして〈六月の虐殺〉やその反響（「絶えざる内戦」⁽²⁸⁾）から、〈第二帝政〉（「力の制度化」⁽²⁹⁾）を経て、少なくとも一八八〇年（「もちろんこの悲観主義は厳密に日付〔年代〕が記されている。早くも一八八〇年から、思考形態は楽観主義へと針路を変えるが、それを本当に併合するようになるのは、今〔二〇〕世紀初頭でしかない」⁽³⁰⁾）まで、頭角を現すのは愛の人間——このような情勢では不可能だ——ではなく、「憎しみの人間」⁽³¹⁾である以上、「憎しみの作品」としての〈神経症＝芸術〉が、「時代の真実」を語るのだ。⁽³²⁾より正確に言うと、サルトルの現象学的社会学によれば、〈ポスト・ロマン派の芸術家〉の「取り戻された読者」とは「有識者たち」（これらの怨恨の人間たち——中流階級の上層——は、彼らが最初の推進力であった〈二月〉の歴史的戦闘の革命運動の先鋭化によっておじけづき、彼らが仕掛けた〈六月〉の畏によって罪責感にさいなまれ、彼らが期待していなかった〈十二月二日〉の反動的クーデターによって裏切られ、要するに、政権に参加する自分たちの権利をくすねられたのである。）に他ならず、そして「有能者たち」は、中産市民の科学的ヒューマニズムの応急修理をする任務——「〈資本〉の統治をヒューマニズムによって正当化すること」⁽³³⁾——をわが物としたので、そして彼らは、「その場以外何も起こりはしなかったであろう」（マラルメ『骰子の一擲』参照）ということを実証するために、人間性を溶解させること——「科学主義とは何よりもまず仮面をつけた大虐殺の夢である」⁽³⁴⁾——をめざしているのだ。これらの読者たちは、〈芸術家〉と共に、作品というこの想像上の統合を復元する読むという企てだけによって、彼ら自身この大虐殺の行為を楽しみ、そして〈虚無〉から「〈われとわが身を罰する者〉」（ボードレール『悪の華』参照）を出現させ、すさまじい激痛のただ中で、彼をそっと自己排除〔自殺〕するように導くのだ。こういう事情なら、作品ののり越え＝読書によ

て復元されることを要請している「一般的意味」は明白である。すなわち「犠牲的自己破壊」⁽³⁵⁾による人間の科学主義的定義にちょうど対応する「人殺しの自殺による皆殺し」⁽³⁶⁾だ(強調は筆者)。それゆえサルトルはこう書く。

読者は公然と自由に憎しみの人間になる……なぜなら後者は、当時、憎しみの作品を読んで理解しうる唯一人の者なのだから。読者は歓喜と恐怖のなかで憎しみの人間になるが、それは自らの隣人を憎しみのこもった＝憎まれる＝人間として構成し、そしてこうして自分に彼を殺害するあらゆる自由を与えようためなのである。⁽³⁷⁾

作家はどうかと言うと、

彼は、事情をよく心得て、ドクサ〔社会学的意味としては、ある時代、ある社会の成員が自明なこととして受け入れている意見〕の番人になった。まさしく彼は生体験のなかに真実なき外観の、「前提なき結果」の世界を見ているので、彼はそこから自分を引き離し、その世界を高所から眺めながら、その脆弱さ、矛盾、虚偽、そして知らぬ間に進行する継続的な一切の消滅のなかに露わになるその非存在を示したいと思うのだが、けっしてその機械論的裏面を見せることはない、そのほのめかしを止めることもない。⁽³⁸⁾

したがって、読書の最中に、「自らの破壊的なすべての激情や自己破壊の欲望」とともに「自らの殺人衝動」⁽³⁹⁾を強く感じて気持ちを新たにできる有能者は、とサルトルは言う、そこに彼がまたま生きているが、どんな確実性も提供できないドクサの世界〔哲学的意味としては、プラトンが根拠のある真なる認識(エピステーメー)に対し、根拠のない主観的信念を指して呼んだ語で、いわゆる臆見、思い込みのこと〕の総合的再構成が自分に勧められている、ということを知っている。たしかに、文章表現の物質性(「文体の美や作品の内在的組織」⁽⁴⁰⁾)が、〔読書という〕この幻想〔精神分析的には、原望充足の働きをもつ想像上の観念で、心象形成のこと〕に、充分な粘稠性〔ねんちゅう〕〔粘りけがあって密度の濃いこと〕を与えているので、この幻想に魅惑される有能者〔読者〕は、そこに反＝人間という自分の残忍なイメージを発見できるのだ。だがこのイメージには明証の特徴もないし、論証のそれもない。なるほど、作者と読者は、「内戦」という過度に緊迫した環境〔社会〕のなかに現れる人間関係の原理として「憎悪の相互性」⁽⁴¹⁾——本物のヒューマニズムのなかに存在するにちがいない「愛の相互性」の逆——を具現している。と言うよりむしろ、「殺害の欲望」かつ「世界像」⁽⁴²⁾としてのこの憎悪が彼ら〔作者と読者〕のなかに具現され、彼らは社会に感染させられた殺人衝動の数々を、想像界において堪能するのである。だが、自分の活動〔読書〕を、記号として点在する作品の再全体化による自らの想像力の自由な遊戯〔ゲーム〕とみなす読者にとって、唯一人の責任者は作者である。

読者は……〈芸術家〉によって提案された遊びの規則〔ゲームのルール〕に従い、そして、それと同時に、いかなる責任も負わない。⁽⁴³⁾

この場合、問題は「指導付夢想」に他ならない以上、読書には、「読者がはまる」や否や、「夢の全特徴」がある。⁽⁴⁴⁾ それで以下は、「取り戻された読者」におけるサルトルの暫定的結論である。

「芸術的な」作品の読書は、〈第二帝政〉下では、神経症的行状になるだろう。⁽⁴⁵⁾

と言うよりむしろ、「神経症＝文章表現」⁽⁴⁶⁾——特にフローベールの『ボヴァリー夫人』——は、その保証を、「幻影＝帝政」⁽⁴⁷⁾——「蜃気楼＝社会」⁽⁴⁸⁾——の治世下では、「神経症＝読書」⁽⁴⁹⁾のなかに見出すのだ。

ところで、『〈未定稿〉＝マラルメ』において、ロマン派以降の作家たちは、体制が彼らに抱かせた軽蔑を〈全人類〉にまで広げたとはいつつ、サルトルは例として、フローベールが愛人ルイズ・コレ宛に書いた二通の手紙のくだりを引いている。一通目は一八五三年九月、二通目は一八五四年三月のものである。

一七八九年〔フランス大革命〕は王政と貴族階級を、一八四八年〔二月革命〕は中産階級を、そして五一年〔ルイ・ナポレオンのクーデター〕は庶民〔下層階級〕を解体しました。やくざで愚かな烏合の衆以外、もう何もありません。ぼくたちは皆、共通の無能状態の同一レベルに落ち込んでいます。社会的平等が精神のなかに移行したのです。……人類は精神的低下〔道徳的墮落〕への激しい情熱をもっており、ぼくはそれに属していることで人類を恨んでいます。⁽⁵⁰⁾
(強調箇所だけがサルトルの引用)。

ぼくは人類とそれが尊重するものがおとしめられ、愚弄され、侮辱され、口笛でやじられるのを見たいと思います。まさしくその点で、ぼくは〔初期キリスト教の〕禁欲的な苦行者たちがちょっと好きなのです。現代の無気力は、人間が自分自身に対して抱いている無制限の尊重に由来します。僕が尊重と言うとき……いや、崇拜、盲目的崇拜です。……ぼくはバダンゲ〔ナポレオン三世のあだ名〕に感謝します。彼が祝福されますように！ 彼はぼくを大衆への軽蔑と民衆への憎しみに連れ戻してくれました。目下の下卑た時代では、これは下劣さに対抗する盾なのです。おそらく！ それこそたぶんぼくが将来書くことになる、もっとも明瞭でもっとも暫定的なもの、そしてたぶんぼくの時代の唯一の精神的な〔道義的な〕抗議になるでしょう。⁽⁵¹⁾

(強調箇所だけがサルトルの引用)。

それに『フローベール論』第三巻の〈第二編〉「フローベールにおける神経症とプログラム作成・

〈第二帝政〉——そこでの主題は、「彼を『〈第二帝政〉の大家』にし、〈九月四日〉〔普仏戦争（一八七〇年七～九月）におけるスダンでの降伏（九月二日）によって〈第二帝政〉が崩壊し、九月四日、パリでは民衆が蜂起、その圧力で〈第三共和政〉が宣言され、臨時国防政府が成立する〕に彼を死なせて、〈第三共和政〉治下では亡命〔引きこもり〕生活を生き延びさせた諸々の理由」⁽⁵²⁾を理解することである——において、サルトルは、ナポレオン三世のお陰でフローベールが「大衆への軽蔑」に連れ戻されたという例の二通目の手紙を論じながら、問題を展開している。

一方で彼は、——精神的で個人的な次元で——階層化された社会を求める神経症者フローベールは、〈共和政〉では我慢できない、と言う（「〈他者〉によって支配されて呪われたギュスターヴは、人間が自らの本質を自分の外に、彼を軽蔑して彼をさいなむ残忍なく他者〉の内に有している限りにおいてしか、人間を認めることができない。」⁽⁵³⁾）。他方で彼は、——政治的で社会的な次元で——フローベールは〈一八四八年二月〉には警戒心が足りなかったことで穏やかに自戒している、と書く（「危うく、彼は〈共和制〉を……受け入れるところだった。彼は、無頓着から、普通選挙を他にいくつもある制度の中の一つとみなす、と表明したことを自戒している、……それは、事実上、是が非でも避けねばならない卑劣さによる支配なのに。」⁽⁵⁴⁾）。

より正確に言えば、ナポレオン三世がフローベールを「大衆への軽蔑」に立ち戻らせるのは、大衆が前者を国民投票で信任した以上、大衆はこの指導者にふさわしかったと、後者が考えているからなのである。要するに、フローベールの見解では、ルイ・ナポレオンは、「群衆に（自己）疎外（隷属化）と士気喪失〔道徳頹廃〕を体現し」⁽⁵⁵⁾に、彼の時代に〔タイミングよく〕到来したのである。

サルトルはかくて軍事的クーデターと一八五七年（『ボヴァリー夫人』——「文学的クーデター」⁽⁵⁶⁾——の刊行年）の間でフローベールが理解しているようなナポレオン三世の中に、一九四五年以前のカミュの不条理な世界におけるカリギュラという登場人物を（ちなみに四五年はこの戯曲の創作年）、——二人の世界の明瞭な差異は認識しつつも——見るまでに至る。一言でいえば、両者の場合、宇宙的全体性に対する皇帝的人物の関係の相似性が問題なのである。

それは汚辱〔おぞましき〕としての、あるいは不条理〔ばからしき〕としての人間的条件の〈啓示者〉、〈告発者〉そして〈実現者〉なのだ。⁽⁵⁷⁾

もっと正確に言えば、それはスキャンダル〔醜聞〕の張本人、その全能によってペルソナ〔人格、位格〕を徹底的にちゃかしながら、人間的尊厳は恥ずべき茶番であることを明らかにする人、結局、生きることの不可能性を生体験のレベルで先鋭化し、そして絶えずそれを自分の全臣下たちに食らわせる任務を帯びている人なのである。要するに、悪魔的な権力をもつこの〈反キリスト〉像〔聖書で、終末時にメシア（キリスト）に敵対するサタン的諸勢力〕は、フローベールを楽しませる、なぜなら彼はこの世を地獄とみなしている、あるいは皮肉っぽい喜びで、バダンゲ〔ナポレオン三世〕の中に〈反キリスト〉を見て楽しんでいるからである。

こうしてサルトルは、「フローベールの神経症」は、それが前もって一八四四年の転倒（「大〔マクロ的〕宇宙の歴史への彼の通時的関係」⁽⁵⁸⁾を要約する事件＝発作）によって、本質において邪悪な、主義として反中産市民的な「個人的権力の体制」としての〈第二帝政〉——そこでは「この若き神経症者は、自らの貴族階級〔エリート集団〕と名づける、己の審美的態度の基盤に他ならないあの無気力なく永遠〔不変性〕>を……生きることができるだろう」⁽⁵⁹⁾——を指示し、要求する限りにおいて、神託的である、と主張する。さらに一步進めたければ、〈帝政〉とパリ・コミュニケーションの崩壊、プロイセンによる占領とそれに続く〈第三共和政〉以降、フローベールは新しい社会にうまく適応しない以上、「神託的神経症」はその充足を〈第二帝政〉のなかにしか見出さず、しかも「〈九月四日〉から生まれた体制」は「フローベールの社会的死」⁽⁶⁰⁾を、彼の肉体的死より十年前に、引き起こす。言い換えれば、新たな歴史的全体化へのフローベールの適応は、単に共時的なのである。つまりマイクロ〔微視〕的時間化としてのフローベールの一生は、マクロ〔巨視〕的宇宙の時間化としての歴史に対する自らの通時的関係を失うのである。たしかに、一八七〇年と七一年末の期間のフローベールの反応（激怒と絶望）は、消滅した時代——〈第二帝政〉——への哀惜〔未練〕を確証するが、要するにその時代こそ、「彼の時代」⁽⁶¹⁾に他ならない。

というのは、容易に〈教会〉——カトリック的楽観主義——で〔と〕結婚する〔結びつく〕体制——軍部と警察の独裁——によってなされる『ボヴァリー夫人』の裁判を彼は経験するけれども、彼はマチルド公爵夫人のサロンやチュイルリー宮に迎えられ、コンピユーニュ〔の離宮〕で二週間過ごし、レジオン・ドヌール勲章を受けることに成功する。だから、サルトルによれば、『感情教育』の小説的審級（「〈二月〉の紛争や〈六月〉の蜂起を復元するのに彼が注ぎ込む熱意、フレデリックとデローリエが人生に失敗したのは、まったく彼らのせいというわけではなく、時代——四八年の紛争——が彼らの挫折に大いに関係があるのだ……」）ということ、彼が私たちに発言する際の仄めかしのしつこさ⁽⁶²⁾にもかかわらず、フローベールは——少なくとも知解の次元では——〈革命〉の意味を理解してはいない。このような省察から、サルトルは一八七一年の出来事と四八年のそのフローベールの見方に適応する「歴史的図式」を引き出す（「七一年は四八年のコピーである」⁽⁶³⁾）。

下層民の大勝利は、墮落したエリートの怠慢か犯罪に起因する……そして普通選挙は必然的に〈社会主義共和国〉に通じる。⁽⁶⁴⁾

サルトルはそこから、〈第二帝政〉の社会において、「フローベールは自分が人生の最高点にいると感じており、反対に〈九月四日〉以後は、彼は生ける屍、化石〔時代遅れ〕になる」⁽⁶⁵⁾、と結論する。

ところで一八五〇年の詩人たち——ロマン派以後のこの殉教者たち——について、サルトルは『マラルメのアンガジュマン』に、彼らは空虚だと知っている〈天空〉や自分たちを見てくれない

<群集>に自分の傷を見せるが、結局「彼らには彼ら自身以外の証人はいない」⁽⁶⁶⁾と書いている。それはちょうど『エロディアド』の<舞台>で、マラルメのヒロイン（「自らの運命に捧げられた哀れな生贄」⁽⁶⁷⁾）が、次のように言うのと同様である。

そう、自分のため、自分のためにだけ、花咲くのです、ひとり寂しい女の私は！⁽⁶⁸⁾

換言すれば、たとえ彼らが<他者>の介入を予想するにしても、彼らがそれを望むのは、自らの詩句への他者のまなざしのお陰で、彼らが自らの作品のなかに客観的に己の姿を見ることができるようになる限りでなのだ。要するに読者——中産市民の読者層——は、至上の目的という己の尊厳を失った、つまり読者は手段になる、そして<読者層>に付与されたこの新しい役割は、<詩>のもっとも徹底的〔根源的〕な変貌の一つに他ならない。それでサルトルはこう書く。

公務員＝詩人は、自己像の客観化について考えるようにしか、読者のことは考えない。それまで<言霊>は詩人と読者の間の仲介者だった。今ではそれは、隠れた庭園に孤独に花咲く沈黙の円柱なのだ。⁽⁶⁹⁾

（強調は引用者）。

ところで、マラルメの詩における<女神〔詩的靈感〕>の出現に似ているこの「言霊の円柱」について、『言葉』のなかに興味深い挿話——注目すべき現象——があるが、それをミシェル・コンタは、ドゥニ・オリエの『散文の政治学、ジャン＝ポール・サルトルと四〇年』を書評した際、「シモノ効果」と名づけた（『ル・モンド』、一九八二年十一月五日付、参照）。ユゴー的な祖父のシャルル・シュヴァイツァーと、毎年恒例の祭りとなっているその日の夜会には不在の、彼の協力者であるシモノさんによって運営されている<現用語学院>で、場面は展開する。ジャン＝ポール坊やや招待客たちの間で、自分が彼らの関心の中心だと感じるのが嬉しくて、おどけている、とその時、不意に祖父の権威ある審判が下り、彼の王座を奪うことになる。

誰かがここにいないな、シモノだよ。⁽⁷⁰⁾

奇跡的なこの言葉の効果で、招待客たちは消えうせ、「ざわめく輪の中心に……一本の円柱、つまり生身は不在の、シモノさん自身が見えた」⁽⁷¹⁾（強調は引用者）、とサルトルは書いている。それで、「シモノさんだけがいないかった。彼の名前を言うだけで充分だった。いっぱいこの会場に、空虚がナイフのように差し込まれたのだった」⁽⁷²⁾。つまらない〔無からの〕息子、余計な子供はこうして、この「空虚の円柱」に対して、この「皆の期待によってうがたれた虚無」⁽⁷³⁾に対して、限らない嫉妬を体験するのである。したがって、サルトルはこう言う。

たえず、地上のある場所で、特定の人たちの中にいて、そこで自分がムダ〔不必要〕な存在だと知ることが、私の、自分の運命だったので、私は、他のあらゆる場所における、他のあらゆる人たちにとって、水のように、パンのように、空気のように、足りない〔不足している〕ものになりたかった。⁽⁷⁴⁾

しかしながら、『サルトルについて』の二つの注目すべき研究論文において、最初に「シモノ効果」——この「言霊の円柱」——を特記したのはフランソワ・ジョルジュである、と私たちには思われる。「両者ともに神格化された不在の、イメージと意識との深い親交」⁽⁷⁵⁾を解明するのがねらいの「<神のごとき不在>」と題された章で、この作家＝哲学者は、サルトル的世界像に特徴的な「イメージとしての円柱〔円柱像〕」を、たしかに私たちに指摘している。

不足〔欠如〕しているものについてしか想像力はありません、そして不足しているものが想像的〔空想的〕活動にとって可能な唯一の報酬である。創造〔創作〕者は、精神生活の糧になるあの外観〔見かけ〕やあの外見〔見せかけ〕を鍛造する、否定的なデミウルゴス〔造化の神、元来は工匠の意。プラトン哲学で、原型としてのアイデアにのっとなって素材から世界を形成する神〕でしかありえない。だから、不足〔欠如〕している事物〔対象〕の相関語は、存在のなかの虚無の円柱に比較しうる内的空虚に他ならず、その虚無の円柱はサルトルのお気に入りのイメージの一つであり、例えば子供時代の経験の描写のなかに見出せる。⁽⁷⁶⁾

（強調は引用者）。

もちろん、彼の「反精神分析的」⁽⁷⁷⁾方法にもかかわらず、フランソワ・ジョルジュは、この「生身は不在の円柱」のなかに、とりわけサルトルが、あの偽の散文家ジャン・ジュネに関してこの種のイメージを語るとき、「性的色合い」⁽⁷⁸⁾を、はっきり言えば「虚無としての勃起したペニスそのもの」⁽⁷⁹⁾を見忘れることはない。

しかしながら、『サルトルについて』の作者は、この「存在のなかの虚無の円柱」——否定〔陰画的知覚——に、むしろある人の無を、誰かの死を見るように、私たちに正当に強く勧める。「誰かがいないとは、父のことで、誰かが余計とは、息子のことだ」⁽⁸⁰⁾と、彼は「<父親>つまり<無>」と題した別の章で、明確にしている。私たちは当然、『言葉』のなかに語られている思い出——サルトルにおける父の不在と通底するシモノさんの劇的な不在——を、『存在と無』におけるカフェの挿話——友人ピエールの効果的〔主導的〕不在の哲学的例証——と関連させることができる。

私はピエールに会うことを予期していた。そして私の予期は、このカフェに関する現実的出来事としてピエールの不在を生じさせた。この不在を私が発見したのは、今では客観的事実であり、そしてその不在は、ピエールと、私が彼を探している部屋との総合的關係として現れる。つまり

不在のピエールがこのカフェにつきまとう、そしてそれは、無化するカフェの背景としての組織の条件〔制約〕である。⁽⁸¹⁾

ピエールとカフェ（または部屋）という単語を〈父〉と世界というそれに置き換えて、このテキストを書き換えてみよう。以下の文章は、サルトルのプシュケ〔人格的統一を成すと考えられた精神現象の総体で、靈魂、心の意〕に、ぴったり当てはまるだろう。

私は〈父〉に会うことを予期していた。そして私の予期は、この世界に関する現実的出来事として〈父〉の不在を生じさせた。この不在を私が発見したのは、今では客観的事実であり、そしてその不在は、〈父〉と、私が彼を探している世界との総合的關係として現れる。つまり不在の〈父〉がこの世界につきまとう、そしてそれは、無化する世界の背景としての組織の条件〔制約〕である。

したがって、フランソワ・ジョルジュが次のように書いているのは説得的であるように、私たちには思える。

彼の父の逝去（死）がいわば彼自身の出現（誕生）に対応しているからこそ……彼は無を一つの問題に、つまりただ一つと同じ問題にするのである。……父は人間なので、人間とは己自身の無である存在、無が世界に到来する存在である、とサルトルは説明するだろう。⁽⁸²⁾

父の呪いというこの見地からすれば、息子ギュスターヴ（次男）の肖像を媒介として、間接的に、父アシル＝クレオファス（家父長）の肖像を描くことをめざしている『家の馬鹿息子』の最初の二巻は、「想像上の父を求めて」という題名をつけることもできるように、私たちには思われる。

他方、『マラルメのアンガジュマン』のなかに提示されたテーマ（「〈言霊〉は隠れた庭園に孤独に花咲く沈黙の円柱なのだ」）を、『家の馬鹿息子』第三巻の「神経症的解決」のなかで、もっと正確に言えば、芸術家が「挫折の彼方としての〈絶対〉」をめざす限りにおいて自らの読者と縁を切った芸術家の挫折のなかで、サルトルが展開しているポスト・ロマン派の最初の世代における無償〔原語は無料、無用、無根拠、無動機、非合理、自由意志、等の多義的な意味〕＝作品という考え方と対比するのは、よりの確であると私たちには思われる。十九世紀後半のサルトル的文学史によれば、中産階級が勝ち誇るこの時期において、ポスト・ロマン派の作家は、消費の文学を自ら拒否することによって、読者もなく、自分は貴族であるとの態度を明確にする。作品は、ロマン主義の時代から、当時は寛容の精神〔気前のよさ〕に結ばれた、そして今はその創作者の自由を表示する、無償〔原語は無料、無用、無根拠、無動機、非合理、自由意志、等の多義的な意味〕という特徴を保ち続けている。より正確に、サルトルはこう書いている。

それ自体における〔即自的〕作品は、作者と読者を排除すると同時に、そのなかに吸収して徐々に解消する。つまり文学は二つの部分〔作者と読者〕から成立しているのだから、両項の一方を排除すれば、必ず他方も消滅してしまう。こうして書物は、書かれず、読まれず、文化の実体化として、おそらく唯一人の価値ある読者が隠れている無言の空の下で、砂漠のなかの円柱〔記念碑〕のように聳え立つ。⁽⁸³⁾

（強調は引用者）。

それで、ポスト・ロマン派は、ムダに〔ただ同然で、わけもなく〕また誰のためでもなく書くが、功利主義の格率を否認し、そして同時に、主義として中産市民的ではない——というのは中産市民は利益の追求によって定義されるのだから——自己の本質を表明する。要するに、「〈芸術〉のために、〈神〉のために、自分のために、ムダに、万人に対抗して書く」⁽⁸⁴⁾のだ。しかしポスト・ロマン派の作家たち——彼らは実際は官僚、公務員、私立学校の教師たちである——は、自分たちを互いに、ものを書く小市民とみなすどころか、彼らは自分たちを、ものを書くために小市民になった貴族と思っているのだ。たしかに彼らは何よりもまず、書くことによって諸個人として定義される。しかしこの選択は、まさしくそれが、この時代における、この歴史の最終段階での、そしてこの情勢〔局面〕における、彼らの階級の可能な諸々の大選択の明示〔特定化〕なのだから、彼らの投錨〔階級存在としての定着〕を確証するだけである。その結果は次のことになる。

作家は、自らの貴族〔エリート〕性と〈絶対＝芸術〉の自律性とを、同時に強く主張するために、己自身の階級とのすべての絆をたち切り、そして現在の自分になることができた社会的条件付けを、一生懸命自分に隠そうとする。⁽⁸⁵⁾

したがって、「情勢」⁽⁸⁶⁾と「作家の階級存在」⁽⁸⁷⁾から生じた要請として「新しい作者とその現実の読者との断絶」⁽⁸⁸⁾という社会＝歴史的な文脈を考慮すると、サルトルが『マルルメのアンガジュマン』で、以前は〈詩人〉と読者の間の仲介者だったのは〈言霊〉であるが、「今は〈詩人〉と〈言霊〉の間の仲介者になるのは読者だ」⁽⁸⁹⁾と言うとき、私たちには彼のことがよりよく理解できる。今や〈芸術家〉を〈公衆〔聴衆、観客、読者〕〉に結びつけていた相互性の関係が断ち切られているのだから、詩の在俗修道者たちは、もはや自分たちの犠牲の上演を「孤独な祝典」として、自己開催するより仕方がない。要するに、「詩人が彼自身の証人なのだ」⁽⁹⁰⁾。だが〈他者〉の不在が彼らのやり方を歪めてしまう（「彼らは彼ら自身の劇の役者になる」⁽⁹¹⁾）ので、彼らはそうとは言わずに、彼ら自身の公然の無神論に反して、結局ある絶対的目撃者を想定することになる。「芸術家の挫折」に輪をかけることによって、彼らには、絶対的意識がこの敗北を勝利と読み取ってくれるように思えるのだ。というのは、とサルトルは言う。

もし<神>の存在を信じれば、挫折は、たいした苦勞もせずに、勝利に変わるかもしれない、なぜなら<神>はその案件の外に——すべての案件の外に——いる〔その案件とは関係がない〕、と同時に私たちのもっとも内心の實在なのだから。⁽⁹²⁾

たしかに一八五〇年のこれらの詩人たちは<神>の存在を信じてはいない、だが彼らは自らの「挫折行動」⁽⁹³⁾によって<神>をほのめかすのだ。あたかも無心論者の絶望が、背理法による<宗教>の証拠となるかのように。そこからサルトルはこう結論する。

彼らは死に至るまで<神>の實在の夢を生きるだろう、そして彼らの悲嘆の魔力がくうつろな天空>に再び住みつくだろう。あたかも<第二帝政>の普遍的喜劇においては、一人の演出家が彼らに模範的な無心論者の役を割り当てたかのように、一切は行われる。彼らは自らの作品や人生において、<神>なき人間の悲惨を誠実に演じる。このようにして、感知し難い絆が……この時代の詩を<演劇>に結びつけることになろう。⁽⁹⁴⁾（強調は引用者）。

この場合、一八五〇年の詩人たちのサルトルによる存在論的＝社会分析が、まさに周知の「負けるが勝ち」の否定的神学に通じていることに、留意すべきであろう。このことは、『フローベール論』については、いっそう真実である。

殉教的〔不当に苛まれた〕子供、フローベール家の馬鹿息子……。彼は、ボードレールと同じく、<否>の神学の世俗的推進者になるだろう。……彼が自分の気づかぬうちにと同様、「滑翔〔俯瞰〕」によって創り出すことになる恥ずべきこの否定的神学は、<制度>によって保証されていない以上、まったく同時に、彼のゴルゴダの丘〔試練〕、彼の神経症そして彼の天才〔守護神〕になるだろう。⁽⁹⁵⁾

このような展望において、すなわち否定的神学の観点から、サルトルは事実彼の『フローベール論』の「もう一つのイデオロギー」のなかに、青年ギュスターヴが十七～十九才の間に書いた『思い出・覚書・瞑想』から数節を引用している。（サルトルはこの原稿を誤って十六才の時と推定している。「次にあるのは、彼が十六才の時にノートに走り書きした覚書である。」⁽⁹⁶⁾）

どうしてぼくはイエス・キリストが實在したと主張し、またそれを確信しているのか。それはぼくが、受難の玄義をこの世に存在する一番美しいものと思うからだ。⁽⁹⁷⁾

ぼくはとても神秘家になりたいなあ。……聖者たちの一生は美しい一生だ。ぼくは殉教者として死にたかったかもね。それにもしく神様>が、慈しみ深い<神様>が、イエスの父なる<神様>がいて、ぼくにその恩寵を、その息吹〔精霊〕を降り注いで下されば、ぼくはそれを授かって、

ひれ伏すだろう……。⁽⁹⁸⁾

[少なくともこの一節は、断章の直前に一八四〇年二月二十八日と日付が打たれていることから見て、一八四〇年の冬～春に書かれたものと推定され、一八二一年十二月生まれのギュスターヴは、当時、十八才と数ヶ月であった。]

ギュスターヴのこの『思い出』を解釈するサルトルによれば、〈受難〉——己の臣下を救うために人間になる〈主〉の無限の寛容〔気前のよさ〕——とは、逆説的に「負けるが勝ち」の行動原理以外の何物でもない。

この同意された屈辱的な死、地上での預言者のひどい挫折は、天上のどこかでは、謎めいた勝利なのだ。⁽⁹⁹⁾

こうして私たちは、サルトル的解釈の核心にある「負けるが勝ち」の原理として——部分的に『言葉』のなかに語られた——「キリスト教的図式」⁽¹⁰⁰⁾を再び見出すのである。

それでは、この試論に結着をつけるために、一挙に『家の馬鹿息子』第二巻の最後に移ろう。サルトルはそこで、フローベールの『三つの物語』の中の一つ、『救護修道士・聖ジュリアンの伝説』（一八七七年）——その聖性は逆説的に彼の親殺しという、反転すればそれ自体が自殺的とも言える犯罪に起因する（「再現された彼の親殺しは、彼が自殺に向かう道を遮る。」⁽¹⁰¹⁾）——について、「負けるが勝ち」の実質的意味を展開しているのだ。サルトルの論評はこうである。

ジュリアンの犯罪は消し難い、だが〈主〉は親殺しを天上に運び去ることによって、赦免された大罪にかかわることも、その細部を消し去ることもなく、それを、論理的で奇跡的な変貌によって、ジュリアンを〈聖性〉への道に引き入れる〔参加させる〕ために、〈自ら〉が〈己の英知〉のなかで選んだ手段にするのである。⁽¹⁰²⁾

そしてサルトルは、こう書き加える。

フローベールは、キリスト教的〈西洋〉のために書いている。そして私たちは皆、今日でもまだキリスト教徒なのだ。もっとも徹底的〔根源的〕な無信仰としてキリスト教的無神論である、つまりその破壊力にもかかわらず、「指導的図式」を——思考のためにはほんの少し、想像力にはそれ以上、とりわけ感受性のために——持ち続けているのだ。そしてその「指導的図式」の起源は、私たちがいやおうなしにその継承者である諸世紀のキリスト教信仰のなかに探求すべきであろう。⁽¹⁰³⁾

したがって、『マラルメのアンガジュマン』の第一部——そこでの問題は、この詩人を彼の文学的世代に位置づけることである——を、『家の馬鹿息子』（とくに第三巻）の全般的文脈のなかに統合することによって、私たちは、一八五〇年の中産市民たちの感受性の変質を引き起こすべくして引き起こした〈二月革命〉や〈十二月二日のクーデター〉という、例の歴史的外傷を経験したポスト・ロマン派作家たち（ボードレール、フローベール、マラルメ、等）の存在論的＝歴史的展望〔回転画〕を、ひとまず終えよう。サルトルにあっては、「階級闘争」という歴史的概念が、「きわめてカトリック的な図式」⁽¹⁰⁴⁾に従う「否定的神学」という存在論的概念と結びつくことに、驚くべきことは何もない。というのは、彼にとって、問題はまさしく、マルクス主義に拠る〔マルクス主義後の〕「キリスト教的無神論」なのだから。*

(しばた よしゆき・高崎経済大学地域政策学部教授)

【註】

- (1) J.-P. Sartre, "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*(1979), p. 177.
- (2) Charles Baudelaire, "Fusées" VII ou XI in *Œuvres complètes* I. Bibliothèque de la Pléiade, Ed. Gallimard, 1975, p.654 ou p. 660. cf. "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 177.
- (3) Baudelaire, "Mon cœur mis à nu" VII in *Œuvres complètes* I, p. 680, cf. *OBLIQUES*, p. 177.
- (4) Sartre, *Baudelaire, idées*/Gallimard, 1963, pp. 20-21.
- (5) "Fusées" XI in *Œuvres complètes*, I, p. 660 ; cf. *Baudelaire*, p. 108.
- (6) *Baudelaire*, p. 108.
- (7) "Fusées" XI in *Œuvres complètes* I, p. 660 ; cf. *Baudelaire*, p. 110.
- (8) Cf. "Au lecteur" dans "Les Fleurs du Mal" in *Œuvres complètes* I, p. 6.
- (9) Gustave Flaubert, *Correspondance*, Septième série, L.Conard, 1926, pp. 234-5; Cité partiellement par Sartre dans "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 177.
- (10) Sartre, *L'Idiot de la famille*, tome III, Ed. Gallimard, 1972, p. 421.
- (11) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 177.
- (12) Pierre Verstraeten, "Sartre et Mallarmé" in *Revue d'esthétique*, Editions Privat, 1982, p. 34.
- (13) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 177.
- (14) "Sartre et Mallarmé" in *Revue d'esthétique*, p. 35.
- (15) *Ibid.*
- (16) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 244.
- (17) *Ibid.*
- (18) "Sartre et Mallarmé" in *Revue d'esthétique*, p. 34.
- (19) *Ibid.*
- (20) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 244.
- (21) *Ibid.*, p. 245.
- (22) *Ibid.*, p. 278.
- (23) *Ibid.*, p. 292.
- (24) *Ibid.*, p. 301.
- (25) *Ibid.*, p. 308.
- (26) *Ibid.*, p. 295.
- (27) *Ibid.*, p. 316.
- (28) *Ibid.*, p. 323.
- (29) *Ibid.*, p. 243.
- (30) *Ibid.*, pp. 295-6.
- (31) *Ibid.*, p. 322.
- (32) *Ibid.*, p. 323.
- (33) *Ibid.*, p. 314.

- (34) *Ibid.*
- (35) *Ibid.*, p. 314.
- (36) *Ibid.*, p. 325.
- (37) *Ibid.*, pp. 326-7.
- (38) *Ibid.*, p. 327.
- (39) *Ibid.*, p. 329.
- (40) *Ibid.*, p. 330.
- (41) *Ibid.*
- (42) *Ibid.*, p. 331.
- (43) *Ibid.*, p. 332.
- (44) *Ibid.*
- (45) *Ibid.*
- (46) *Ibid.*, p. 206.
- (47) *Ibid.*, p. 510.
- (48) *Ibid.*, p. 475.
- (49) *Ibid.*, p. 403.
- (50) Flaubert, *Correspondance*, Troisième série, pp. 349-350 ; cf. "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 178.
- (51) *Correspondance*, Quatrième série, pp. 33-4 ; cf. "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 178.
- (52) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 447.
- (53) *Ibid.*, p. 459.
- (54) *Ibid.*, p. 460.
- (55) *Ibid.*
- (56) *Ibid.*, p. 458.
- (57) *Ibid.*, p. 461.
- (58) *Ibid.*, p. 464.
- (59) *Ibid.*, p. 463.
- (60) *Ibid.*, p. 464.
- (61) *Ibid.*, p. 465.
- (62) *Ibid.*, p. 448.
- (63) *Ibid.*
- (64) *Ibid.*, p. 452.
- (65) *Ibid.*, p. 447.
- (66) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 178.
- (67) Mallarmé, "Hérodias" in *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Ed. Gallimard, 1945, p. 47.
- (68) *Ibid.*; cf. "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 178.
- (69) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 178.
- (70) Sartre, *Les Mots*, Ed. Gallimard, 1964, p. 73.
- (71) *Ibid.*
- (72) *Ibid.*, pp. 73-4.
- (73) *Ibid.*, p. 74.
- (74) *Ibid.*
- (75) François George, *sur Sartre*, Christian Bourgeois Editeur, 1976, p. 223.
- (76) *Ibid.*, p. 229.
- (77) *Ibid.*, p. 12.
- (78) *Ibid.*, p. 229.
- (79) *Ibid.*, p. 230.
- (80) *Ibid.*, p. 245.
- (81) Sartre, *L'être et le néant*, Ed. Gallimard, 1943, p. 45.
- (82) *sur Sartre*, p. 242 et p. 246.
- (83) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 151.
- (84) *Ibid.*, p. 153.
- (85) *Ibid.*, p. 155.
- (86) *Ibid.*, p. 146.
- (87) *Ibid.*, p. 150.
- (88) *Ibid.*, p. 145.

- (89) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 178.
- (90) *Ibid.*
- (91) *Ibid.*
- (92) *Ibid.*, p. 179.
- (93) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 173.
- (94) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 179.
- (95) Sartre, *L'Idiot de la famille*, tome I, Ed. Gallimard, 1971, p. 534.
- (96) *Ibid.*, p. 606.
- (97) Flaubert, *Souvenirs, notes et pensées intimes*, Buchet/Chastel, 1965, p. 49 ; cf. *L'Idiot de la famille*, tome I, p. 608.
- (98) *Ibid.*, pp. 60-61 ; cf. *L'Idiot de la famille*, tome I, p. 606.
- (99) *L'Idiot de la famille*, tome I, p. 608.
- (100) *Ibid.*
- (101) Sartre, *L'Idiot de la famille*, tome II, Ed. Gallimard, 1971, p. 2112.
- (102) *Ibid.*, p. 2117.
- (103) *Ibid.*, p. 2124.
- (104) *Ibid.*, p. 2125.

* Nous donnons ici le dernier morceau du 4^{ième} chapitre de la thèse de doctorat de III^{ième} cycle sur J.-P. Sartre, présentée à l'Université de Provence en 1984.